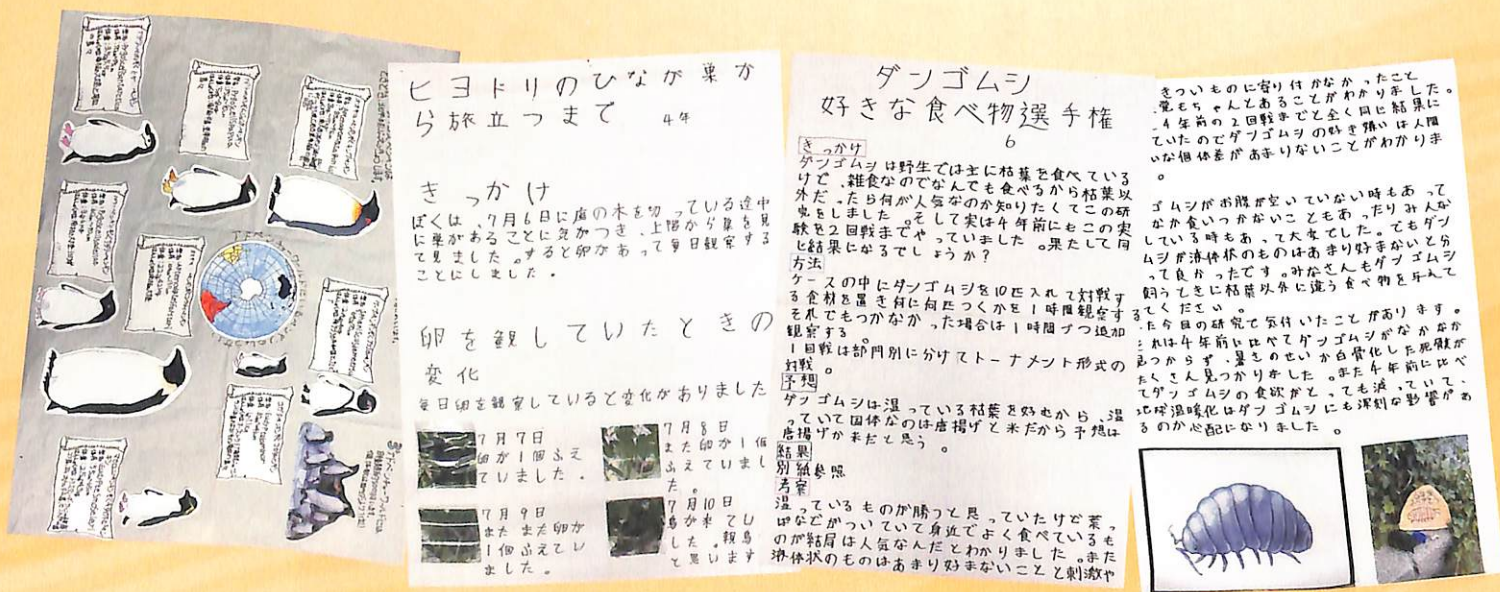


(令和 6 年度 第 3 年次)

研究開発パンフレット

研究開発課題

様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓く子どもを育成するため、
自らの生活を語る「かがやく時間」を新設し、
力強く自分の考えを伝えようとする言語能力を育成する教育課程と指導法を研究開発する。



令和 7 年 3 月

国立大学法人奈良国立大学機構 奈良女子大学附属小学校

〒631-0024 奈良市百楽園 1 丁目 7-28 TEL 0742-45-4455

「かがやく」の時間で
豊かな人生を切り拓く
子どもを育てる

1 研究開発課題

様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓く子どもを育成するため、自らの生活を語る「かがやく時間」を新設し、力強く自分の考えを伝えようとする言語能力を育成する教育課程と指導法を研究開発する。

2 研究の概要

本研究は、学習指導要領総則の第2の2－（1）に示された学習の基盤となる資質・能力の言語能力について、より高度な言語能力の効果的育成を目指す教育課程を研究開発することをめざす。具体的には、新教科「かがやく」の時間を設定し次の4点について研究を進める。

- ① 教科書の文脈ではない子どもの文脈を重視したパフォーマンス課題の学習により、効果的に言語能力を育む。
- ② 一人ひとりの学びの文脈を重視することで「自分の目標・知識・可能性を発達させ、社会に参加する力」「学びを人生や社会に生かそうとする力」といった学びに向かう力・人間性等を涵養する。
- ③ 「教わってから考える学習」から「考えてから教わる学習」への転換をはかり、そこでの効果的な指導法を究明する。
- ④ 国語科を中心とした教育課程全体の授業時数を削減しつつ、効果的に言語能力を育む新教科「かがやく時間」の教育課程を明確にする。

3 研究の目的と仮説等

本研究の目標は、「現在十分になされていない言語能力の効果的育成を目指す教育課程を開発し、その効果を確認すること」である。この目標の達成のために「かがやく時間」を新設し、そこにおいて次のような目的を設定する。

目的1

一人ひとりの子どもの学びの文脈を重視したパフォーマンス課題を設定することで、効果的に言語能力を育成できることを確認する。

目的2

一人ひとりの子どもの学びの文脈を重視するからこそ、「自分の目標・知識・可能性を発達させ、社会に参加する力」「学びを人生や社会に生かそうとする力」などの学びに向かう力・人間性が涵養されることを確認する。

目的3

一人ひとりの子どもの学びの文脈を重視した「かがやく時間」の学習で、「考えてから教わる学習」の効果的な指導法を究明する。

目的4

「かがやく時間」の学習では、教科横断的なトピックを通して言語能力育成に寄与し、その結果として従来の国語科の内容のおよそ40％を削減する他、全教科を合わせた総時間が削減できることを確認する。

研究仮説

本研究では、言語能力を効果的に育む新教科「かがやく時間」を設定する。言語能力の育成は、「国語科を中核としつつ、全ての教科等での言語の運用を通じて論理的思考力をはじめとした種々の能力を育成するための道筋を明確にしていくことが求められる（言語力育成会議資料5）」とされてきた。しかし、国語科の学習指導の中で、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の指導を充実させることができず、結果的に十分な言語能力を育成できていないことや、言語の運用を通じて教科横断的に言語能力を育むことも十分な成果をあげられているとは言えないことが指摘されている現状に鑑みれば、「話すこと・聞くこと」や「書くこと」を国語科から移管し、必然的に教科横断的な学びを展開できる新教科として扱うことが相応しいと考えている。この新教科「かがやく時間」について、以下の4つの仮説を設定して研究開発を進める。

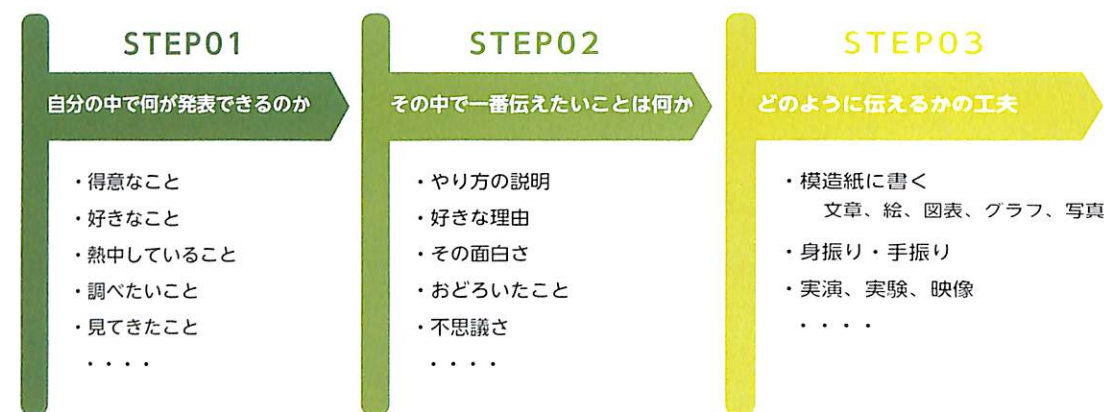
仮説 1

「学びの文脈を伝える言語能力」「文脈を受け止め深化発展させる言語能力」の育成のためには、「学びの文脈を伝えるパフォーマンス課題」を設定し、反復して自分らしさを表現することに取り組み続けさせることが有効である。

仮説 1 の「言語能力」の育成は、次の 2 段階から成り立っていると考えられる。

第 1 段階

一人ひとりの子どもの学びの文脈を伝えるパフォーマンス課題として、例えば低学年の「自己紹介」「宝物を紹介しよう」や中学年以降の「最近、ぼくが気になっていること」「自由研究発表」などを想定している。こうしたパフォーマンス課題に取り組む中で、子どもたちは次図で示されるプロセスを経て言語能力を高める学びを重ねていくと考えている。

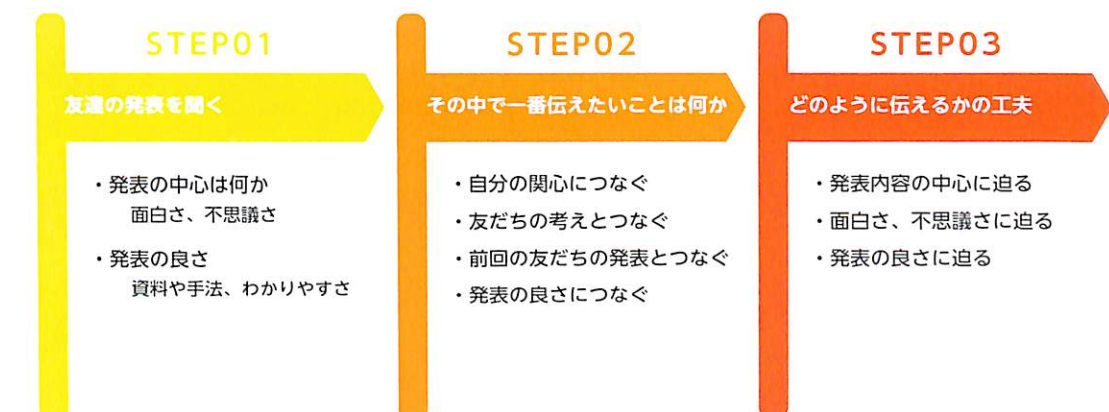


子どもたちは、まず、自分の中で発表できることは何かを見つめる作業を始める。そして、発表できそうなことの中で何を伝えるのかを探り始める。時にはこれまでに知っていることに加えて調べたり、資料を集めたり、試してみたりと様々な探究活動も行う。その過程で自ずと言語活動も活発になり、

語彙等も増えていくに違いない。「僕は、大好きな恐竜のことを発表しよう。恐竜が生きた時代は中生代白亜紀だから…」と、曖昧であった知識を確認して語彙や知識も増やしていく。友だちが知らないことを発表するのだから、正しく分かりやすく伝えたいという意識も働く。発表するために、模造紙にまとめたり実演や実験の準備をしたりするかもしれない。一人に一台配付された ICT 機器を調査や表現のツールとして活用する子も出てくるだろう。実際の発表に向けては、身振り手振り、絵や図表を使う、実演・実験を交えるなど、より分かりやすい発表へ向けてのシミュレーションや練習も重ねていくことになる。こうした学びの中で「学びの文脈を伝える言語能力」を育んでいく。

第 2 段階

十分な準備を重ねた友だちの発表を聞くことは、他の子どもたちにとっても楽しい学習となる。そして、その発表を聞いた後に自分たちが「おたずね」をし、そのことによってさらに発表されたことが深まったことを実感できるようにすることがとても重要だと考えている（次図）。



本校では、子どもも教師も、発表や話の後に「おたずねはありませんか」という言葉を盛んに使う。一般的に使われる「質問」が硬い雰囲気という言葉であるのに対し、「おたずね」は子どもの学びの世界から生まれた応用力のある優しい言葉だからである。

子どもたちは、友だちの発表を興味津々で聞く。その際には、自分がその発表に「おたずね」をすることを想定して発表を聞く。自分が「おたずね」できるためには、聞きながら発表の中心や発表の良さを意識することが重要である。「おたずね」するにあたっては、自分の関心とつなげたり友だちの考えにつなげたりその発表の良さにつなげたりと、様々なことにつなげることも意識させたい。こうしたことを意識づけながら、その友だちの前回の発表や別の友だちの発表、さらには他教科の学習内容などと、その日の発表内容を俯瞰して「おたずね」できる力を育んでいく。「おたずね」とその

応答によって、内容を深めていくことへの意識も重要である。そのためには、発表内容の中心、その発表の面白さや不思議さ、発表の良さなどに迫る話題を形成していくことも意識させたい。こうした学びの中で「文脈を受け止め深化発展させる言語能力」を育んでいくことができると考えている。

(計画書 仮説 1)

—— 仮説 1 から私は次のように考えた ——

教科書ありきでない、自分らしさを生かした自分の学びを創る。

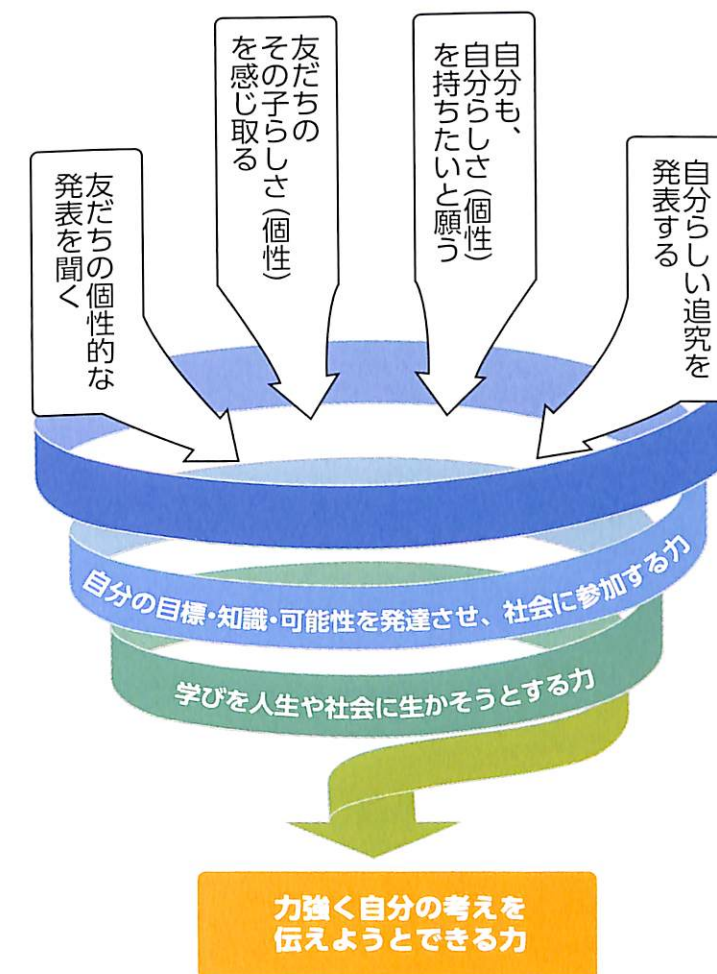
国語科の教科書の「話す力・聞く力」を養うことを目的とした学習活動が例示されているページは、全国すべての児童を対象に仕組まれているため、そこに示された課題にそって行われる発表内容は、個々にとっての必然性がどうしても弱いものになりやすい。必然性の弱い発表は、発表者本人の思い入れも弱くなる。すると聞いている側にとっても伝わりにくく、つまらないものになってしまう。発表者側にとっても聞く側にとっても必然性の弱い、つまらない発表では、一定の形としての学習は成立するかもしれないが、その時間で完結してしまい、そこで得たものが今後の生活の中で生かされたり、更なる学習に発展したりするようなことになりにくい。今、教室内で行われる学習の多くが、教科書の内容をなぞり、期限までに終わらせることが一番の目的となっているため、子どもにとっての必然性が弱く、主体的でもない、形だけが整ったもので終わっているのではないか。

もちろん、教科書編集者側の意図としては、あくまでも一つの形を提案しているのであって、それぞれの学校や学級の実態に合わせて工夫してほしいという考えであろうが、現場ではほとんどその提示通りに実践が行われているのが実態であろう。「かがやく時間」では、自分の生活と発表の内容につながりが見られるような課題設定を考えるため、児童の個性が発揮されやすくなる。

また、教科書の単元構成では、数か月ごとに「話す力・聞く力の育成」を目的にした単元が配置されるが、時々ではなく、日常的、継続的に力を育成する活動を行うことが重要であると考えている。

仮説 2

一人ひとりの子どもの学びの文脈を重視した学びの反復で、「自分の目標・知識・可能性を発達させ、社会に参加する力」「学びを人生や社会に生かそうとする力」といった学びに向かう力・人間性等を涵養することができる。



仮説 1 で設定したパフォーマンス課題に取り組むことで、「自分の目標・知識・可能性を発達させ、社会に参加する力」「学びを人生や社会に生かそうとする力」といった学びに向かう力・人間性等を育むことができると考えている。その理由は次の通りである。

子どもたちは、友だちの個性的な発表を聞くことで、一人ひとりの「その子らしさ(個性)」を見つめていく。そして、それぞれの友だちの良さに気づく中で、自分も、「自分らしさ(個性)」を持ちたいという願いを強くしていく。そして、「自分らしさ(個性)」を見つめる個性的な追究に取り組み発表しようとする経験を重ねる。同時に、子どもたちは今の自分の個性がどのように、これからの人生や社会と関連するのかに気づくこともできる。

こうした経験の積み重ねの中で、子どもたちは少しずつ自分への洞察を鋭くし「自分らしさ」に磨きをかけていく。だからこ

そ「自分の目標・知識・可能性を発達させ、社会に参加する力」「学びを人生や社会に生かそうとする力」などの学びに向かう力・人間性等を育み、「力強く自分の考えを伝えようとする力」言語能力を、効果的に育成することができると考えている。

これらの積み重ねの根本には、幼児期の教育も大きく影響してくると思われる。1対1の対話から1対多の対話へ、また自己中心的思考から客観的思考へと変容していく幼児期において、周囲の大人や友だちの助けを借りながら、自分の考えを言語化する経験の中で、学びの連続性を捉えることが「力強く自分の考えを伝えよう」とできる」言語能力の育成につながると考えている。(計画書 仮説2)

—— 仮説2から私は次のように考えた ——

友だちの考えや活動の良さがわかり、他者の学びを自分の学びに取り入れ発展させることが出来る子どもを育てる。

友だちの良さを見つけよう、認めよう、尊重し合おうという意識が、自分の良さをも尊重してもらえる環境づくりにも繋がり、そのことが「自分らしさ(個性)」を発揮することへの意識の高まりへと繋がっていくと考える。自分の思いを表現しても受けとめてもらえるという安心感があると自己表現がしやすくなる。教師がまずそのような環境を整えることが重要である。教師はことある毎にその環境を創ることを意識した促しや、誘いなど出方を考えねばならない。

また、学びの文脈への意識を高めることについては、めあてを持って学習に臨み、後にはふりかえりを行い、また次時への意識を高めるというような日々の学習活動が繰り返されることが重要だと考える。特に、本校の児童が毎日書き続けている日記が、そこに大きな影響を与えることが出来ると考えている。

ある日の2年生の「かがやく」の時間で、ひとりの児童が自分の飼っているかたつむりについて発表を行った。「かたつむりはコンクリートを食べます」という内容に多くの児童が興味を示し、発表後のおたずねでもそのことが話題となった。発表を聞いたある児童はその時間のふりかえりとして、次のようにノートに書いていた。

コンクリートにカルシウムが入っているから食べると聞いて、どうやってカタツムリはコンクリートにカルシウムが入っていると分かるのか気になりました。そのことについて自分でも調べてみたいです。

まず、友だちの発表をただ何となく聞くだけでなく、この児童のように心を寄せて聞けるように育てたい。本校では「おたずね」「つけたし」「かんそう」がその手立てになると考えている。先のふりかえりを書いた児童も、「どうやってカタツムリはコンクリートにカルシウムが入っていると分かる

のか」という自分なりの問題を持つことが出来た。しかし、一般に子どもの中に生まれるこのような問題は解決されずに捨て置かれることも多いだろう。しかし、この児童は自分の中から生まれた問題を放置せずに追究を行っていった。

次はそのことに関する日記である(読みやすいように漢字に変換して載せている)。

4月22日(金)「カタツムリ」

今日、Hくんの話を聞き、どうやってコンクリートにカルシウムが入っているのか不思議になりました。私は一年生の時、カタツムリのことを調べました。大きい触角は明るさや暗さが分かるのと、小さい触角は味とにおいをかぎ分けます。それを繋ぎ、カタツムリにはカルシウムのにおいが分かるのかなと予想しました。

このことをどうやって調べたらいいのか、考えてみたいです。自由研究発表にしてもいいかもしれません。

5月12日(木)「カタツムリの触角」

今日、かたつむりを見て、触角をさわりました。すると、すぐに触角を引っ込めました。引っ込めた時、殻ではないのどの部分に黒いのがありました。それは引っ込めた触角です。引っ込めた触角は、のどの所に入っています。

触角の一番上の場所には、横幅1mmの半分の丸い穴があります。もしかすると、その穴からにおいが入り、体に何か分かるようになっているのだと思います。どうやってその実験をすればいいのかな。

5月14日(土)「カタツムリの触角」

今日、カタツムリの本を四冊借りてきました。前の日記で、「小さい触角は暗さが分かる。大きい触角はにおいをかぎわけけるもの」と書きました。でも私が見間違えたのです。小さい触角はにおいをかぎ分ける。大きい触角は危険がないかさがずのと、目で少し見える役割があります(見えるのは少しだけ)。借りてきた本のどれにもそう書いてあるので、それは合っていると思います。

ちなみに、大きい触角のことは、大触角という名前で、小さい触角は小触角という名前があります。

私の疑問は「コンクリートの中にカルシウムがあると、どうやってわかるのか」です。きっと、小触角で、においで分かるのだと思いますが、『元そがわかるじてん』で調べても、カルシウムににおいがあるか分かりませんでした。

カルシウムににおいがあるか実際に私がカルシウムのものを集め、においをかいでみますが、カタツムリにはカルシウムのにおいがわかって、人にはわからないにおいなのかもしれません。

その後もこの児童は、次のように自分で本を調べたり、観察や実験をしたりしては、そのことを日記に綴っている。

5月18日「かがやくの発表」触角と、のどのこと

5月24日「かたつむりのたまご」

6月 1日「かたつむりがすきなたべもの」

6月 4日「かたつむりがすきなたべもの大じっけん」

6月 5日「かたつむりのじっけんのけっか」

6月 8日「かたつむりの一番好きなもの、ダンボールと紙」

4月22日の日記に、その日の「かがやく」の時間のことを書き、その中でもう一度学習をふりかえりながら、自分の中から生まれた問題を明確にできたことが、このような一か月以上に渡る追究を続けられることへと繋がったと考える。

日記が無ければ、この児童の疑問や生まれた問題は学習のふりかえりの時間だけのこととして、捨て置かれることになったかもしれない。その日の学習をふりかえり、「かがやく」のことを書こうと考え、もう一度学習を思い起こしながら、自分の考えを整理し日記に綴る。この作業を通して、学習時に沸いた疑問や問題がより明確なものになっていき、自分ごとの学びとしてさらに深化させることへ繋がった。このように本校の「日記を毎日書く」という活動は、個々の学びの深化に大きく影響していると考えられる。本研究を通して、本校での日記のあり方、教師の関わり方も含め、日記がもたらす効果や影響についても整理し明らかにしていきたい。

仮説 3

「教わってから考える学習」から「考えてから教わる学習」への転換を実現することで、効果的に言語能力を育む指導法が究明できる。

平成27年に国立教育政策研究所から出された「資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告書1～使って育てて21世紀を生き抜くための資質・能力～」の中で、「子供は失敗から学ぶ力を持っている（生産的失敗法）」という教育手法について報告されている。「子どもは教えないと考えることはできないのか」との疑問から行った実験の結果として、「考えてから教わるクラスでは、教わってから考えるクラスより、概念を深く理解し、応用問題で優秀な成績を収めた」ことが報告されている。必要な知識を教えてから考えさせるよりも、教わる前に自分たちで考え、その上で必要なことを教わった方が概念を深く認識できることが示されているのである。

仮説1で設定したパフォーマンス課題での発表は、予め必要な学習内容を教わってから考えられたものではない。子どもが考えた発表内容に合わせて、学級として学び取るべきことを教わる学習を実現することができれば、予め必要事項を教わってから考える学習よりも、より深い概念理解が得られると考えられる。

「教わってから考える学習」から「考えてから教わる学習」への転換を目指すにあたっては、発表内容に合わせて学び取るべき能力を抽出し、その能力の指導系統を明かにしていく必要がある。研究の過程で明らかにすべき能力ではあるが、例えば次のような能力を想定している。

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> • 伝えたいことの中心を捉える。 • 伝えたいことの構造を俯瞰する。 • 伝えるために必要な情報を収集する。 • 情報を正確に理解し必要な事を取り出す。 • 分かりやすく伝えるために、必要な資料や手法を選択する。 | <ul style="list-style-type: none"> • 伝えたいことの論を組み立てる。 • 組み立てた論を効果的にプレゼンテーションする。 • 算数科、理科、社会科など様々な領域から、必要な概念を見つけ出す。 • 既得の知識や経験と結びつけて分析・評価し、自分の考えを練り上げる。 |
|--|---|

—— 仮説3から私は次のように考えた ——

すぐに目に見える結果を求めると教えてしまう。しかしそこで目に見える結果は本当の生きてはたらく力になるのか。じわじわと伸びて行くという人が成長することの本質に目を向ける。

2年生での「かがやく」の時間の一幕を紹介する。

(その時間の発表者である一人の児童が、自宅で育てている白いいちごと赤いいちごとについて発表を行った。発表後、それに対する感想やおたずねを聞き合うやりとりが行われた)

C

白いいちごとがどうしてもできるのかなと思って考えました。たぶん、お日様があたっていないから白くなるんじゃないかなと思いました。

発表者

この白いいちごは、種類がそういうものなので、お日様があたるかどうかは違うと思います。

日当たりと植物の成長についての発言内容もよく考えていると思うが、私はこの時、次のように言った。

T

(板書で「どうして」→「たぶん」と書いた所を指しながら)

友だちの発表を聞いて「どうしてかなあ」というのを見つけること、大事にしてほしいなあ。しかもね、〇〇さんは「どうしてかなあ」で終わらせずに、「たぶん」で自分の考えを言えたよね。これ、すごいなあ。

教科書の単元をなぞるように、「教わってから考える学習」としてこの場面を考えるなら、発表時や意見の交流時、対話的な学びの場面での一つの話型として「どうして〇〇なんだろう。たぶん□□だからだと思います」という書き方や、話し方を決めてから全員に考えさせる、書かせる、発表させるという学習活動が行われるのだろう。しかし、そこには子どもの必然性がない。子どもたちにとっては、その一時の学習、練習として活動は終えられていく。それでは、次にその話型を生かす場面がイメージされない。だから定着しない。もちろん、この時間の私（教師）の出方によって、果たしてどれぐらいの児童に私が注目した内容が伝わり、生きて活用できるようになるかは未知数である。しかし、少なくとも本校ではこの学びを生かすことが出来る場面は日々設定されている。意識があればこの話型を発表や発言に生かすことが出来る。自分が忘れていても、意識がなくても、まわりの誰かが生かすことで、繰り返し教師が取り上げたり、注目させる出方をしたりすることで、またその都度考える機会が持てる。するとそのうちに自分に取り入れることができるようになっていく。人が成長するということはこのようなちょっとした事の繰り返し、積み重ねによって成されていくものなのだ。

これまでの日本の教育では、あまりに短期、もしくはその場で見える結果を求め過ぎてきた。「学びに向かう力・人間性等の涵養」とあるように、じわじわと水が染み入るように力を伸ばしていく我々教師の捉えが必要である。

仮説 4

「かがやく時間」の学習は、教科横断的なトピックを通して言語能力育成に寄与し、その結果として従来の国語科の年間授業時数のおよそ四〇パーセントを削減する他、総授業時数を削減することが可能である。

仮説 1 で設定したパフォーマンス課題においては、それぞれの子どもが自分の文脈に沿った追究を進め、その結果を発表していく。発表の内容は、子どもの遊びの延長であったり知的好奇心に基づくものであったりと多岐にわたるため、必然的に理科的な分野や算数的な分野や社会的な分野など、多方面での教科横断的な学びが展開できる。年間を通しての発表内容を分析し、教科横断的に取り組む内容や他教科から削減する内容の検討を進める。

具体的には、仮説 3 に例示した言語能力に関する内容の他、「表とグラフ」等の統計資料を扱う内容、自然観察や実験を扱う内容、訪れた場所の地理等を扱う内容など、毎年必ず発表内容として現れるものを抽出し整理することで、他教科から移行できる内容や教科横断的にカリキュラムマネジメントする内容を検討する。(計画書 仮説 4)

——— 仮説 4 から私は次のように考えた ———

「かがやく」の時間を中心とした児童主体の学習によって、「話す・聞く」「書く」力を効果的に育成できる。それにより、国語科の教科書の内容削減を図り、カリキュラムオーバーロードの解消に繋げる。

先述のように、一般的に多くの公立学校で行われている、教科書で設定された「話す力・聞く力」の育成を目的とした活動では、どうしても児童にとっての必然性が弱くなってしまいがちである。そのような学習で得た知識や技能が、その後の生活に生かされていないという実態に対して、私は「かがやく」の時間の学習によって、その生きてはたらく力の育成が出来ると考えている。

また、「かがやく」の時間に行う資料作成を通して「書く力」の育成もできると考えている。「書く力」を育成する学習は、子どもたちにとっての「書かされる」活動にならないようにしたい。「教師の求める一つの形に書きあげた」という成果重視の活動による、画一的な指導に偏らないようにしたい。それは、皆が同じような形の文章を求められるのでは、子どもたちにとっての面白みもなく、学習の個性化も図られないと考えるためである。これでは学習への意欲的な態度も伸ばせないであろう。自分が発表したい、自分だけの発表のための資料作りだからこそ必然性も生まれる。国語学習の、主に低学年における説明的文章を読む学習で学んだ「分かりやすく伝える工夫」も生かされる。これでこそ本当の力に繋がるのではないだろうか。

私たちは「かがやく」の時間に加え、本校で行っている「日記」「めあてとふりかえり」「独自学習と相互学習の往還」といった活動が、子どもたちの生活で日々繰り返される環境を設定することにより、それらが一体となって「話す力・聞く力」「書く力」を効果的に育成できると考えている。これにより、まずは国語科の授業時数のおよそ 40% の削減に取り組み、その後、全教科に渡るカリキュラムオーバーロードの解消へと繋げていきたい。

一. はじめに

グローバル化、人工知能（AI）の台頭、私たちを取り巻く社会は急速に変化している。このような時代において、学校に求められる役割や学校が果たすべき役割とはどのようなものか。

現行の小学校学習指導要領には、「学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構築するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。」と記されている（※1）。

しかし、そのように謳いながらも教科書の内容は、依然として子どもたちの親世代とたいしてかわりがなく、大人数での一斉授業や一コマ45分という時間割においては、祖父母世代ともほとんど変わらない。

こういった旧態依然とした環境で、学校は一体どのようなことができるというのであろうか。現場にだけ高い目標を求められているようで、どのように取り組んだらよいのか、その入り口が見えてこない。

このようなジレンマを抱えた現在の学校現場に希望の光を与えるのが、本校が文科省の指定を受け、行っている「かがやく」の時間ではないかと筆者は考えるのだ。

「かがやく」時間とは、本校が文科省から研究開発学校の指定を受け、取り組んでいる新教科のことであるが、この「かがやく」の時間が面白いのである。また、この「かがやく」の時間を通して見えてくる子どもたちの姿に学校教育への希望を感じるのである。一体何が面白いのか、何に感動するのか。現在の学校教育が果たすべき役割と共に考えてみたい。

二. 「かがやく」という教科とは

「かがやく」は、「はなす力」「きく力」の育成をねらいとしている教科であるが、「自分の文脈で学ぶこと」ができ、対話と言う協働性によってその学びを再構築することができる教科でもある。

簡単に説明すると、子どもたちが、話したい、伝えたいと思ったことを黒板の前に立ち、発表（スピーチ）する時間なのであるが、ただ発表をし、それをクラスメートが聞くという活動ではない。これまで、「日直スピーチ」や「自由研究発表会」など、子どもたちが伝えたいことや自由研究を発表する活動は全国各地の学校で行われてきたと思うが、それとは少し異なる。

「かがやく」時間は、「話し手」が伝えたいことを話すだけの時間ではなく、「聞き手」が「おたずね」をすることで、「話し手」と「聞き手」の「問答」が始まり、双方の「問答」、つまり対話によって授業が進められていくという時間なのだ。

（一）発表内容は自分の文脈で選び、対話により進められていく

本学級では、四月の二週目より「じこしょうかい①（2時間）」「みんなに伝えたいこと①（2時間）」、五月には「みんなにつたえたいこと②」「れんきゅううちゅうのはなし（7時間）」、六月と七月には「じこしょうかい②～わたしのすきなもの～（12時間）」というテーマで発表してきた。

二学期には、「なつ休みのじゅうけんきゅう（12時間）」、「みんなにつたえたい

こと③（6時間）、「ふゆ休みまえにみんなにつたえたいこと」（2時間）を発表してきた。このように年間を通して大まかなテーマは設定しているものの、すべての基本は子どもたちの「話したいこと・伝えたいこと」であり、実際に話すテーマは子どもたちが自分で決めなければならない。

初めの「じこしょうかい①」の発表では、①自分の名前②すきなもの（すきなこと）といった2文程度の発表であったが、その2文程度の発表に対して「それ（好きなもの）はどういったものなのですか。」というおたずねや「なんでそれがすきなのですか。」といったおたずねが飛んだ。発表者が伝えたいことが聞き手のおたずねによってどんどん深掘りされていくといつのまにか学術的な内容に近づくようなことも見られ、びっくりする。発表者がおたずねに答えられなかったことは、持ち帰って調べることも多い。例えば、テントウムシについて発表した子どもが、「テントウムシの種類はどれくらいあるのか。」のおたずねに答えられなかったので、家に帰り調べると「テントウムシの種類は六千種類にのぼる。」ということが分かった。

このように、発表をして終わりではなく、発表したことが聞き手の「おたずね」によって深められていく。それには発表者自らが答えることもあるし、聞き手が答えを知りたいがために後で調べて発表者やみんなに伝えることもある。そのような問答でお互いが学び合うのである。高学年になると「その根拠はどこにありますか。」とか「その情報はどこに載っていますか。」といったような問答にも発展していく。

主体的な学びを求めても自由度の低い環境の中では、本当にやりたいことはできない。「かがやく」の最大の楽しさは自分の学びたいことを自分の文脈で探究していけることだ。自由度の高さが魅力である。子どもたちは、日々の生活の中で、「こんどの『かがやく』では何を発表しようかな。」と常に考えを張り巡らせる。終始テーマが一貫している子どももいるが、複数のテーマを持ち、その時々で変わっていく子どももいる。それは子どもたちの多様性であり、テーマが変わることも一貫していることも主体的に学びに向き合っている証拠なのである。

（二）各自の文脈で選んだテーマは、他者をひき付ける

話す内容を自分で決めることができるから、その内容は大変多様性にあふれたものである。子どもの発表に真剣に耳を傾ければ傾けるほど、その発表は連続した子どもの生活の歴史でもあることに気づく。「かがやく」時間では、普段の授業だけでは到底わからない子どもたちの様子、学びの文脈がよくわかる。幼いながらも子ども一人ひとりが作り上げてきた人格のようなものが、確かにそこに存在する。それがゆえに他者をひきつける。聞いている子どもたちはもちろん、担任や参観している保護者や来校した教育関係者も興味津々で聞き入っている場面が見られるのはそういった理由からだと思える。

「かがやく」の子どもの発表を聞いていると、子どもは、授業の中だけで学んでいるのではなく、生活という連続的な営みの中で、たくさんのことを学んでいることがよく分かる。

前号の学習研究（512号）で筆者は、「学びとは連続的な営みであり、子どもの興味関心は教科や学年といった教育課程によって分断されたりしない」と述べた（※2）。分断されず、自分の文脈で自由に学習できるからこそ、面白いのであり、学ぶことに満足でき、そのことで自分自身に満足する。そのことは自己肯定感につながる。自己肯定感ができてこそ、他人を尊重することができる。他人を尊重できるからこそ、協働的な学びが成立すると考える。

(三)「かがやく」の内容は教科の系統性につながる

「かがやく」の発表を聞いていると、算数は生活の中にある物の存在や事象を人に正確に伝えるために発展してきたのかもしれないと思うようになってきた。子どもが遊びや生活の中で育てた概念を抽象的論理的な数学の世界につなげていくことが、我々教師として大事なことなのだと再認識した時のエピソードを紹介する。

(A児の「スケート」の発表から)

スケートのレッスンに通っているA児がスケートの話を発表する時、タブレットに撮ってきたレッスン風景をみんなに見せた。子どもたちは興味津々で見入っていた。すると、誰かが「そのレッスン場の広さはどのくらいなのですか。」とスケートリンクの広さを問うた。この問いも素晴らしいと思う。

タブレットから映し出されるリンクの広さが実際にどのくらいかということを知りたいのである。子どもは体感したいのである。この知りたいとか体感したいという心が学びにつながる。

認知科学者の今井むつみは、子どもが言葉を真に獲得するためには現実世界から具体的な情報を受け取り、身体的に理解する必要があると言う(※3)。

特にこの時期の子どもたちは、物の存在や事象について、言語だけの説明で理解することが難しい。それを自分の目で見たり、触ったり、感じたりして納得しないとその存在や概念を受け入れにくい。納得することで整理され、知識として記憶される。そして、納得して記憶したが故に、必要な時に取り出し、使うことができると筆者は考える。

長さや重さの表し方は、まだ未習であるが「cm」や「g」という普遍単位は日常耳にするので「かがやく」の発表でもこのような普遍単位を使う子どもがいて、「それは10センチくらいですか。」「その重さは1キロくらいですか。」などというおたずねが出るのであるが、広さの普遍単位は日常で使われることが少なく、広さの普遍単位を使ったらよいなどと言うアドバイスは、この時には出てこなかった。

A児が黙り込んでしまうと、誰かが「それは大運動場くらいですか。それとも大運動場の半分くらいですか。」というおたずねをした。それはいい助舟である。普遍単位が分からないなら、共通認識が可能な広さを探し出せば、リンクの広さが共有できるからだ。大運動場の半分という表現がしっくりいかなかったのかA児は、また、黙り込んでしまった。なにやら考えているようだった。少しの間、沈黙が続いた後、A児は「南運動場(小運動場)二つ分くらいの大きさです。」と答えた。それを聞いた他の子どもたちから「へー。」と言った声が聞こえた。ようやくスケート場の広さを共有することができたのである。A児にとって、スケート場の広さは、「大運動場の半分」ではなく「南(小)運動場の二つ分」だったわけである。

数学者の遠山啓は「数学と実在をつなぐもっとも太い帯の一つが量である。」と言う(※4)。一年生の子どもにも広さ(量)の概念があり、それを割合の概念の「○○の二つ分(2倍)」とか「□□の半分(½倍)」とかを使って必死に伝えようとしていることが分かる。難しいとされる割合の概念は、四年生や五年生になって突如作られるものではなく、その萌芽が一年生にもあるということだ。

このようなやり取りを日常的に行ない、学んでいく子どもたちは、日常のいたるところで、数や量や形に関心を持ち、それを生活に生かす術を身に付けていくだろう。

B児は、休日に父親と自転車に乗ったことを日記に書いた。かなり長い間、自転車をこいだと日記に書いていた。どのくらいの距離をこいだか。父親にたずねると7キロで、歩数で表すと一万歩以上だと分かった。B児はその歩数に驚いている。それだけ自転車

をこいだのだとびっくりしている。百以上の数はまだ未習ではあるが一万の大きさを感じたB児は、算数の授業で一万という数を習う時には、この経験が生きてくるだろう。もっと学年が上がり、「単位量あたり」という概念を学ぶと、一步あたりの長さを出すこともできるだろう。また、この時にかかった時間が分かれば、時速を求めることができることを知るだろう。このように子どもたちの興味関心や知り得た事実がどんどんつながって大きな学びになっていく。

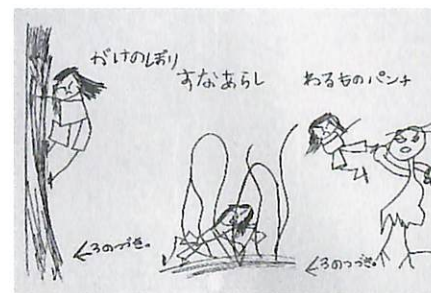
35人がそれぞれにいろんなことを発表するので、算数につながるものもあれば歴史や地理につながるものもある。また、生物、物理、化学につながるとされる発表もある。子どもたちが学年を重ねるごとにこれらがいろいろな領域の教科に発展すると考えると「かがやく」は、大変興味深い教科なのである。

(四)ものの本質を見抜く力を育てる

「はじめに」にも述べたが、私たちを取り巻く社会は、急速に変化している。このような不確かな時代を生き抜くためには、様々な情報を見極める力、すなわち、「ものの本質を見抜く」力が大事になってくるが、子どもたちはそれをもともと持っているのではないと思うことがある。分かりやすい例が「はだかの王様」という童話である。純粋な子どもたちは、偏見なしに純粋に物事をみようとする。「かがやく」の授業をしているとそのような子どもの「ものの捉え方」に感心することが多々ある。

(C児の「ラプンツェル」の発表から)

C児はディズニー映画のキャラクターであるラプンツェルが大好きである。発表する時は、必ずラプンツェルの話が出てくる。はじめて「ラプンツェル」について発表した時、だれかが「ラプンツェルのどこが好きなんですか。」と問うた。すぐに、C児は「長い髪です。」と答えた。この時期の子どもは、お姫様に憧れたり、長い髪の毛に憧れたりすることはよくあるのだが、継続して発表を聞いていくと、C児が「ラプンツェル」の長い髪の毛に惹かれるのはもっと深いものがあると感じるようになった。アニメ映画「ラプンツェル」は、塔の中に幽閉されている主人公、ラプンツェルが魔法の力が宿った長い髪の毛を使って、自由を勝ち取るというお話である。この長い髪の毛が愛と勇気の象徴として物語が進んでいくのである。だから、ラプンツェルと言えば、長い髪の毛なのであって、C児は単に長い髪の毛に憧れているだけではなく、ラプンツェルの主題の愛と勇気を表す長い髪の毛が好きなんだと理解できるようになった。C児は物語の主題をきちんと捉えているのだ。文学作品の主題を捉えることは国語教育の中で大切にされることであるが、子どもは教科書の中だけでなく、日常に出会う物語の中でも、大事なメッセージ(主題)を受け取っている。



C児は、自分も「長い髪の毛」になりたいと願い、そのために必要なこととして次の3つを上げた。

- ①よくべんきょうをする。
 - ②(強くなるための修行を)なんどもれんしゅうする。
 - ③あきらめずにれんしゅうする。
- ※強くなるための修行として「がけのぼり」や「すなあらし」、「おる毛のパンチ」をあげ、絵にかいて説明している。

(写真の絵：C児の日記より)

(D児の「漫画三国志」の発表から)

D児はウルトラマンが好きで、これまでずっとウルトラマンについて発表してきた。二学期は「三国志という漫画が面白くて読んでいます。」という発表をしたが、前回発表したウルトラマンと三国志のつながりは何だろうと筆者が考えあぐねていたところ、複数のおたずねの後に、ある子どもが「Dさんは、ヒーローものが好きなんじゃないか。」とウルトラマンとのつながりをつぶやいた。聞いていた筆者もそうか、ウルトラマンと三国志の共通点は、そこかもしれないと思った。正義のために戦う勇者にD児は魅力を感じているのかもしれないと思ったのである。このあと、D児は日記に「ぼくはヒーローが好きなかもしれない。」と書いている。このように子どもは幼いながらも「○○さんはなぜ、それに興味を持つのか。」「どこに惹かれているのか。」など、友だちの伝えたいことの本質を探そうとしている。

三、不確かな時代の学校教育

一年生の「かがやく」の授業は、探究的な学問につながっていくような発表ばかりでもない。趣味の領域を出ないだろうと思える発表もあるし、家族旅行を発表するという旅の報告会のような発表もある。しかし、子どもたちの「かがやく」の発表を聞いていると、どの発表が素晴らしいとか、発表に点数をつけて評価するようなものではなく、すべての発表がその子ども自身の歴史であり、尊いと感じる。

旧態依然とした授業のやり方、つまり決められた教育課程の中で学び、到達度で評価されるような学びではなく、子どもの文脈で学び、その中で自己と対峙し、他者と討議し、学年を超えてもお真理を追求し続け、新たな価値を構築することができる「かがやく」のような時間(教科)が必要であると筆者は考えるのだ。現行の教育課程をすべてそのようにする必要もない。学ぶことのすべてを子どもが自分たちの意志で選択するには無理がある。

しかし、本校のように週に2時間の「かがやく」時間があることで、子どもたちの学びが主体的で対話的なものになり、学校が生きいきとした場所になるのではないかと考えるのである。

最後にF児が連休中の話を発表した時のエピソードを紹介する。

F児が、連休中の話として、「家族でおばあちゃんちに行き、夜の公園でブランコをこぎました。」と発表した。子どもにとって公園とは昼間に遊ぶところだ。それが夜に行ってみた。F児にとっては、さぞかしワクワクする冒険のような体験だったとみえる。その日、提出した日記には「星がきれいでブランコをこぐと手が届きそうでした。」と書いてあった。F児の発表を補足するために筆者が「こんな風にブランコをこいだんだよね。」と夜の公園でブランコをこぐ真似をした。すると、クラスに「わー。」と言う歓声が上がった。クラスの子どもたちにとってもF児の体験は同様にワクワクしたものだったのだろう。続けて、ブランコをこぎながら「こんな風に星に手にとどきそうだったんだよね。」と、星をつかむようなしぐさをすると、また、「わー。」という歓声が上がった。ここは昼間の教室であるにもかかわらず、みんながF児の体験を追体験しているのだった。

子どもたちの心はなんと豊かなことか。筆者は、ある種のファンタジーを感じた。子どもたちは、このような現実とファンタジーの世界を行ったり来たりしながら、

夢や希望、そして人生を生き抜くための勇気といったものを手に入れているのではないかとさえ思った。筆者もまた、このような子どもたちの姿に未来への夢や希望を感じた。学校教育への希望を感じたのだ。「かがやく」の時間が面白いというのは、このような理由からである。

四、終わりに

子どもたち各々が体験したこと、日々考えていることを他者と共有する中で共に学び合い、生きる力に変える。これが「かがやく」の時間ではないかと筆者は考える。

「かがやく」はどここの学校でもできる。

「かがやく」を行う学校が増え、学校が生き生きとした場所になることを願う。

(引用・参考文献)

※1 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 算数編 第1章 総説 1頁

※2 山本純子(2024)「幼児期の学びを小学校の主体的・対話的な学びにつなげる～一年生のスタートアップに大切なもの～」奈良女子附属小学校学習研究(512号)

※3 今井むつみ(2023)「言語の本質」岩波文庫

※4 遠山啓(1981)「量と何か—I 内包量・外包量」太郎次郎社 8頁

ペンギン博士になろう
～アドベンチャーワールドWishツアー～

2年

1. ペンギンのほねとペリカンのほねをひかく
ペリカンのほねは長く、20cmくらいでかる
かたです。だんめんは、こまかい空どうでした。

ペンギンはみじかくて、重かた
です。ぎしりつまっていました。



2. たまごをかんさつ

ペンギンのたまごは、5しゅるいありました。
エンペラーペンギン、キングペンギン、アデリー
ペンギン、ヒゲペンギン、コカクタペンギン
です。さむいちいきにいるペンギンは
たまごが分厚くなっています。



3. 羽根をさわる

ひなのほえかわるじきに、
ぬけたふわふわの羽根と大人の水
をはじく羽根をさわりました。
大人の羽根は、内がわがふわふわで、

体おんをイ保、ています。外がわは、水を
はじくように、なっています。



4. おたずね

ペンギンのことの、おたずねをしました。

Q. じゅせいらんいどうは、していますか？

A. していないです。ですが、いろんな
動物園や、水ぞくかんに、かせるように、た
くさんはんしゅくをさせているそうです。



5. フイズ

植物が全く生えていないところに
主なはんしゅく地があるペンギンは？

A キングペンギン B ジェンツーペンギン

C エンペラーペンギン D ヒゲペンギン

すあなをしまつてはんしゅくするペンギンは？

A キングペンギン B ミナミイワトビペンギン

C コカクタペンギン D アデリーペンギン





7月10日
鳥か来てしま
した。親鳥た
と思います

マコーベシバギタマハヒン
ギン
学名: Euphytesmoseleyi
体長: 5.5 ~ 15 cm
体重: 2.5 ~ 4.9 kg
生息地: 川谷、クニニヤ
カヌタ、カヌタ、カヌタ



7月25日
ひながとうと
う生まれまし
た。



7月26日
ひなにもが
えました。



7月28日
巣から脱走す
るひながいま
した。



7月29日
巣に1匹もひ
なはいません
でした。



7月29日
成長したひな
が庭に1匹い
ました。

ぼくは、7月10日に何の鳥か気になったので
図書館で借りてきた鳥の本で調べてみました。
調べてみるとヒヨドリににっていました。なぜ
なら、頭の色と体の色が本と一緒にだったか
です。



※ヒヨドリについて

鳴き声… ビーキ、^ッビーキ
生息地… ビル街、^森林など
大きさ… 約 28cm
食べる物… パンくず、花の蜜など
巣を作る季節… 5月～7月

ヒヨドリについて質問 に思ったこと

- ① ひなのおしりから白い物が出ていたこと
- ② 巣がきれいなこと → それを親が食べていた
この疑問に思った事を王子動物園の人に聞いて
見ました。①については、「おしっこか、
フンだと思う」と言っていました。つまり②
の理由は、フンを親が食べているからだという
ことがわかりました。



感想

ばくは、7月6日に巣を見つけてその巣の中に卵があった事を良かっと思った。去年も1回この木に鳥の巣ができていた事があり、今回の鳥の巣は残しているの成長したひなが来年卵を産んでくれるかとても楽しみです。

※参考...『みんなが知りたい! 日本の野鳥
観察に役立つ見わけ方・聞きわけ方がわかる本』
(植田睦之・監修)
メイツユニバーサルコンテンツ発行

<資料③: 自由研究の実際 6年生 Cさん>

ダンゴムシ 好きな食べ物選手権

6

きっかけ

ダンゴムシは野生では主に枯葉を食べているけど、雑食なのでなんでも食べるから枯葉以外だったら何が人気なのか知りたくてこの研究をしました。そして実は4年前にもこの実験を2回戦までやっていました。果たして同じ結果になるのでしょうか?

方法

ケースの中にダンゴムシを10匹入れて対戦する食材を置き何に何匹つくかを1時間観察する。それでもつかなかった場合は1時間ずつ追加観察する。

1回戦は部門別に分けてトーナメント形式の対戦。

予想

ダンゴムシは湿っている枯葉を好むから、湿っていて固体なのは唐揚げと米だから予想は唐揚げか米だと思う。

結果

別紙参照

考察

湿っているものが勝つと思っていたけど葉っぱなどがついていて身近でよく食べているものが結局は人気なんだとわかりました。また液体状のものはあまり好まないことと刺激や

匂いがきついものに寄り付かなかったことから嗅覚もちゃんとあることがわかりました。そして4年前の2回戦までと全く同じ結果になっていたのでダブゴムシの好き嫌いも人間みたいな個体差があまりないことがわかりました。

感想

ダブゴムシがお腹が空いていない時もあるのかなか食いつかないこともあったりみんないている時もある、大変でした。でもダブゴムシが液体状のものはあまり好まないと分かって良かったです。みなさんもダブゴムシを飼うときに枯葉以外に違う食べ物を与えてみてください。

また今回の研究で気付いたことがあります。それは4年前に比べてダブゴムシがなかなか見つからず、暑さのせいかわ骨化した死骸がたくさん見つかりました。また4年前に比べてダブゴムシの食欲がとっても減っていて、地球温暖化はダブゴムシにも深刻な影響があるのか心配になりました。

